創造性の生まれる地盤（一）

恩田　彰

幼児の創造性すなわち（Maslow. A. H.）マズローのいう自己実現の創造性を開発するには、幼児の想像力が豊かであること、それがおとなにとって非現実的であり、非生産的にみえても、それが自然の姿であることを理解すべきである。

そのことが理解できず、または誤解したために、子どもの可能性の実現をはばむことになるということに注意すべきである。そこで幼児の創造性が生まれる地盤として、それを育てる条件として、幼稚園の先生として、心がけるべき点についてトーランス（Torrance, E. P.）の研究に基づいて考察してみようと思う。

1　創造的学習の促進

幼児はもともと創造的な仕方で学習しているものである。なぜならかれらは権威ある人から、権威のある教科書に基づいて学ぶというよりは、自分のやりたい仕方で学ぶ経験を多く持っているからである。子どもたちは質問し、自分で調べ、探索し、動かし、実験し、創作し、そして遊ぶ。いつも自分のやり方で事実の探索をし、または何かを創造していくのである。

もし何かまちがっているとか、足りないとか、理解できないと思うと、それを放っておくことができず、納得のいくまで探索しないではいられないのである。そこでさらに探索し、質問し、試験し、改め、動かし、こわし、つくりなおしてみるのである。

また自分で何かを発見し、何かをつくり出すと、そのことを友だちや先生や親に知らせたがる傾向がある。そこで先生は、

子どものアイデアや発見・発明または創作を認めてやり、激励してやることが必要である。

2　そのものを学ぶことから　それについて学ぶことへ

子どもに楽器を持たせる。すると子どもはその楽器に創造的な仕方で接触するであろう。すなわち子どもたちは、思いのままにその楽器にさわり、嗅ぎ、ながめ、軽くたたいて、できるだけいろいろなやり方で楽器をさぐろうとする。楽器を直接に学びとろうとするのである。こうした後に先生がその楽器について説明すると、よく注意して聞くようになる。

この直接経験こそ楽器の演奏にとって大切であるばかりでなく、創造活動の基礎になるものである。そこで私たちは子どもに教えることの意味と時期を考えて、なんでもはじめから説明するという形での教えこむという方法はさしひかえねばならないと思う。

3　興味の持続

子どもの興味の持続は極めて短いものだという見方がある。だから子どもの興味を持続させるためには、新しい活動をつぎつぎにかえてやらせるやり方がとられるのである。そこで子どもに考える時間や自発的に注意の転換をさせる時間を十分に与えることができない。また性急に教えてしまう結果になりかねない。

ところが実際には四―五歳の子どもでも、活動領域によっては三十分以上も熱中することもあるのである。トーランスは、幼稚園から小学六年生までに六十分も一生けん命にやる実験を試みている。その場合やらせる活動には、変化を持たせていたという。したがって幼児の興味の持続は短くても、内容に豊かな変化を持たせることによって、学習に集中させることが可能である。

4　想像を生き生きとさせる

幼児の空想は、生き生きと伸ばしてやることが必要である。しかし、子どもが幼稚園や小学校に入る時に、親や先生が一生けん命空想力を押えようとする場合も少なくない。というのは空想は不健康で、非生産的で、おとなの生活には役に立たないというのである。

しかしながら子どもが想像力を働かして話をし、それを絵や工作を通してあらわし、劇に演じ、遊びに表現することは、子どもの生活の自然の姿であることを知るべきである。

この空想を生み出す想像力は、子どもの探索や創造活動の基礎になっているもので、成人の創造活動にとっても欠くべからざるものである。子どもの想像は本来生き生きとしているもので、これをおとなになるまで押しつぶしてしまうので、成人はその創造活動に大切な想像力が貧弱なのである。

そういう意味で想像力がもっとも活発にあらわれる幼児期において、これを生き生きと発揮させるように努力しなければならないし、これをおとなになるまで豊かに育成していくことが必要である。

5　ちがった見方をさせる

創造性を開発する技法の一つにシネクティクス（Synectics）という方法がある。これはゴードン（Gordon, W. J. J.）によって生み出されたが、これは見慣れないものを見慣れたものに、あるいは見慣れたものを見慣れないものにすることによってアイデアを生み出すのである。この方法は直観力を養成するのに用いられる。

たとえば見慣れたもの（固定化された世界）から見慣れない、新しいものを発見させる方法に人格的類比の方法がある。それは「もし自分が時計になったら、どんなことを考えるでしょう」「自分がサンタクロースだったら、どんなことをするでしょう」と自分がそのものになって感じ、考えるのである。この方法により化学者が運動している分子になって、分子に起こることを身体で感じ、考えることによって分子構造に関するアイデアをえている。

シネクティクスは産業界で成果をあげている。この方法はおとなは恥かしがってやりにくいが、子どもの方がかえってやりやすい。まして幼児は得意で、幼稚園ではよく行なわれている方法である。実はこの方法は子どもだけのものではなく、おとながアイデアを出す方法として有効であることに注目すべきである。

子どもにお話をしてやり、本を読んであげる場合、最後まで話の筋をたどっていくことにおとなは注意しがちである。しかし子どもはその筋そのものよりも、その筋道を自分で想像して追っていくことを楽しんでいるようである。また結果を予想することを楽しむが、その話の結末はどうなろうと大した問題で

はないのである。さらにその先はどうなるかも考えているのである。

子どもは同じ話を何べんも聞くことを欲する。それは単なる繰り返しではない。話をいっそう深く味わい、くわしく想像し、考えたいのであり、そのことを楽しむのである。そこで話の筋を理解させることも大切だが、それにとどまらず想像力を拡大し、深化させるような創造的な聞き方を養うことも必要である。このやり方は創造的に読書するやり方に発展していくのである。

6　物をよく観察させ、操作させる

子どもは物を操作して調べたいという強い欲求を持っている。この欲求は成人の好奇心や創意工夫の基礎になっている。物をよくながめ、それをいじくってそのものを知ろうとするのである。たとえば子どもが虫めがねをもって遊ぶ。虫めがねを近づけて物を見ると、新しいおどろきが生ずる。

子どもははじめは、遠くで見ることで満足するが、やがてそれに満足できなくなる。近づいてながめ、物の実体を多面的に見ることによって、それがアイデアの基礎になる。この態度はおとなにとっても大切なものである。

物を操作することが多い子どもは、成長すると表現することが豊かで、アイデアももっとも多く出し、独創性も高いといわれている。

この面の育成は、創造的表現力の基礎になるもので、産業界における新技術の開発にとって重要なる要因になっている。

7　沈黙やためらいに対する寛容

創造活動は必ずしもスムーズには流れない。そこにはゆきづまり、葛藤などが生じて、ためらったり、黙ったり、動かなくなることがある。トーランスが創造的思考テストを子どもにやらせてみて、子どもがためらっているときに、急がせたり、せきたてたり、反応するように強制しても、得るところがないということを述べている。

ためらっている子どもに「これはただおもしろ半分にやるんだよ」といってやると、よく反応するようになったと述べている。またテストで子どもがいうことをそのまま書いているのをみると、子どもは安心してどんどん作業するようになった。子どものいうがままに書いていくことが、批評することより、ま

た認めたり激励したりすることよりも、子どもはよく活動するということであった。

創造活動は、一時の沈黙や活動の停止の後に自発的にあらわれることが少なくない。そういう時には、親や先生は子どもの発言や活動が、自発的にあらわれるのを待つ心構えが必要である。

8　活動の場をつくり、材料を豊かに提供する

子どもが自分のアイデアを実現するための手段を与えるために、設備や材料を豊かに提供する必要がある。この場合材料は商品価値のないものであってもよい。工場などで出てくる半端ものや屑となるような、捨てられるもので、創造活動に役立つものが少なくない。

そこで実業界にいる父母に理解してもらって、創造活動にとってすばらしい材料や設備を無料でまたは安く提供してもらえることができると思う。創造活動には、多くの豊かな材料が必要である。子どもはこれらを思いのままに使って、何かを発見し、また何かをつくり出していくのである。

9　アイデアを具体化させる

子どもは自分の生み出したアイデアが何かの具体的な形で表現された場合、想像力や思考力が高まるものである。子どもは自分が描いた絵、つくった詩や物語、考え出した発明工夫、これらに非常に興味と誇りを持つものである。

子どもは他人が自分の作品をほめてくれると、勇気をもって、積極的に新しい作品をつくり出そうとする。

そこで先生や親は、子どものアイデアが具体化できるように、活動の場を提供し、また適切に指導していく必要がある。もちろん子ども自身にやらせるわけであるが、それがうまくいかない時には、ヒントを与えたり、表現のしかたを指導してやるのである。

自分のアイデアや気持を表現しようとする時、ことばでよく表わせない子どもがいる。その場合、絵をかかせたり、役割劇で表現させることが有効なことがある。創造活動では、アイデアは大切であるが、それを表現することも同様に重要である。そこで言語で十分に表現できなければ、絵とか動作で、さらにいろいろな表現手段を用いて、豊かな表現ができるように指導していくことが必要と思われる。

（東洋大学）